

1952年SIRI会議

—琉球列島における米国文化戦略の起点—

泉水 英計

1. はじめに

1951年9月、サンフランシスコで講和会議が開かれ戦争が正式に終わった。日本本土は主権を回復したが、琉球列島では米軍の占領が継続し、長期的な展望にたった住民統治計画に資する正確な地誌情報が不可欠となる。これを提供したのが、SIRI（琉球列島学術調査）という研究者派遣事業である。1951年度から1953年度のほぼ3年間に総計26名の研究者が派遣された。陸軍省と全米学士院の契約にもとづいて、太平洋学術部会（Pacific Science Board）が調査を実質的に運営する。医療、食糧、そして人類学の3分野があり、現地の占領行政組織であるUSCAR（琉球列島米国民政府）の各担当局から出された要望を踏まえて調査活動が展開された。

1952年SIRI会議とは、主に人類学を担当するUSCAR民間情報教育局の事業計画のために同年1月に沖縄で開かれた会合である。第1期の調査の一部は未だ進行中であったが、全体として事業運営は好調にみえていた。太平洋学術部会を代表して来沖したハロルド・クーリッジ（Harold J. Coolidge）は、事業の更なる発展を期して2人の特別顧問を同行させる。人類学者のジョージ・マードック（George P. Murdock）と歴史家のジョージ・カー（George H. Kerr）である。3人は滞在中の派遣研究者から最新の現地事情を聴取し、民間情報教育局の職員とともに具体的な活動計画を策定した。

極東で冷戦体制が固まりつつあるこの時期に琉球列島に足を踏み入れた米国の人類学者たちは、彼らにとって処女地に等しかった島々で何をみたのである

うか。また、住民統治の安定化を狙うUSCARの文化戦略に、その新たな知見をどのように活用しようとしたのであろうか。これらの問いを考えるうえで鍵となるのが1952年SIRI会議である。少人数のインフォーマルな雰囲気の中であるが、それだけに、かえって出席者は本音で語っていると考えられる。今のところ公式な議事録の存在を確認できず、会議の内容を伝えるのはカーが残した筆録のみである。36枚の短ぎ取り用紙に発言者と発言の要点を記してある。しかし、後日清書するために鉛筆で走り書きしたものであるため、判読できない文字が多い。判読可能な部分も大幅に語句が省略されているため、そのままでは意味をなさない。

そこで、以下では、筆者の翻刻例を示したうえで、SIRI報告書や業務書簡など会議以外での発言者の主張や見解を参考に、筆録では省略されている発言内容を補う校訂を加えてみたい。カーが自身だけのために残したものであるから、誤字脱字が訂正されていない可能性が高い。また、省略部分の充当は筆者の推測であり、そのように語句を挿入し内容を補えば、想定される文脈において意味が通るということに過ぎない。必ずしも確証が得られないような作業を取っておこなうのは、校訂したうえで注釈を付すことで、この史料をより広く利用可能にしたいからである。

資料は一括して本論末尾の「1952年SIRI会議ジョージ・カー筆録」に掲載し、本文中で言及する度に該当箇所をシートの番号（F+数字）で示した。

2. 太平洋学術部会顧問団

クーリッジがマードックとカーを伴って沖縄に到着したのは1月17日であったようだ¹。翌日から、民間情報教育局、公衆衛生福祉局、そして食糧天然資源局の順で、それぞれ2日間にわたり局員との会合をもつ。1月25日には、次年度の事業全体のバランスを考慮して、各局内で合意された調査計画の調整をはかった。翌26日にUSCAR主席民政官の認可を受けて、陸軍省への最終的な勧告を作成している。

カーのメモは1月18日の午前中から始まる。クーリッジとマードックを含む3名はまず次席民政官のケネス・フォスター（Kenneth W. Foster）大佐を訪

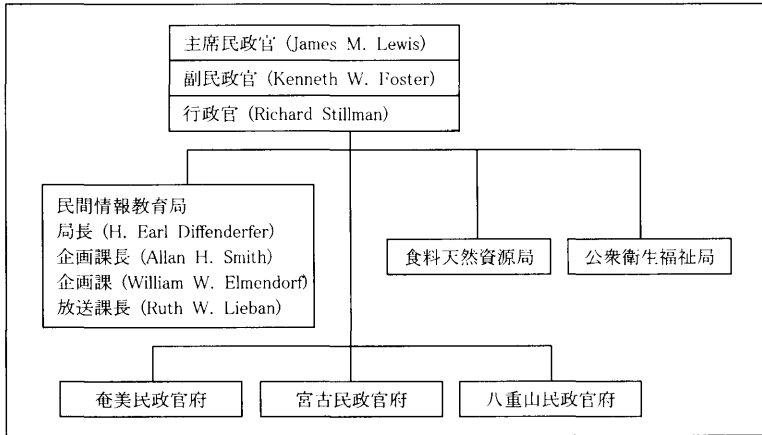


図1 1952年SIRI会議に関する民政府組織と役職者

問し、彼からリチャード・スティルマン (Richard Stillman) 中佐を紹介された。上記の図1「1952年SIRI会議に関する民政府組織と役職者」に示したように、USCAR事務を統括する行政官である。会談ではSIRI事業の運営組織と次年度計画にあたっての留意点が確認された (F18)。

顧問団3名のうち早くから琉球列島との関わりがあったのはマードックである。よく知られているように、彼は戦時中に海軍軍政学校で民事ハンドブックを編集していた。イエール大学の通文化概観 (Cross-Cultural Survey) をもとにした、太平洋占領地域の軍政計画を立案するための基礎資料だ。琉球列島編を仕上げた彼は侵攻直後の沖縄に配属され、軍政府の政治部長として住民代表の組織化を監督したが、上官との対立から1945年秋には除隊している²。

帰国したマードックが音頭を取って創設したのが太平洋学術部会である。1946年6月に、研究者と軍および政府関係者とを結集した大規模な会議が開かれ、日本の後退により一気に広がった調査機会と、安全保障上の要請とを調整する機関の設立が決定された。事務局長にはクーリッジが就任する。翌1947年から海軍の依頼を受けたCIMA (ミクロネシア人類学共同調査) 事業が開始され、1949年には動植物学をも包括したSIM (ミクロネシア学術調査) 事業へと発展している。琉球列島は当初より学術部会の活動地域に含まれていたが、入域が許可されなかった。クーリッジが来沖し軍政長官から調査への賛同を取り

付けることができたのは1950年3月である。しばらくして朝鮮戦争が勃発したため手続きが遅れ、翌1951年1月にクーリッジが再度沖縄を訪問して準備を整え、漸くSIRI事業は実施に漕ぎ着けた。

残る一人のカーは、マードックと同じく軍政学校で民事ハンドブックの編集にあっていたが、担当は台湾であった。侵攻作戦が中止され国民党軍が進駐したため軍政計画は実施されなかった。終戦直後に台湾に派遣され武装解除と帰国する日本人の監督にあっていたが、1946年1月に國務省外交局へ転属し台北副領事となっている。台湾人と新来の大陸中国人との対立が深まるなか、米軍による介入の必要と正当性を強く主張していた。しかし、上司の賛同を得られないまま、翌年3月に国民党軍による台湾人虐殺という破局（2.28事件）を目にすることになる。

1950年度からはスタンフォード大学フーバー研究所に所属し、陸海軍の情報機関へ提案する東アジア調査企画を策定した。台湾に加えて琉球列島も対象とする調査シリーズである。USCAR経由でこの調査企画を知ったクーリッジは、そのうちの1つである南米沖縄人移民調査をSIRI事業として即座に実施に移している³。他の調査案には、カー自身が担当することになる琉球史の編纂があったが、この時点では参考資料の収集整理事業であった可能性が高い。カーを同行する許可をUSCARに求めるクーリッジの書簡では「琉球にとって長期的な価値をもつと思われる極めて興味深い企画」と言及されるに留まっている⁴。各部局の勅告案をまとめた1月25日作成の文書には「USCAR業務支援のためのドキュメント・プロジェクト」がみえる。政策資料および職員教育の教材として現地に検索用文庫を設置し、マイクロフィルム複写によって米本国でも利用可能にするという計画であった。追記からは、翌26日にこれが琉球史編纂に差し替えられたことがわかる⁵。

3. 現状報告

本格的な会議は1月18日金曜日の午後と翌19日土曜日の午前中に開かれた。前者では主に派遣研究者が現状報告をおこない、後者ではこれを踏まえて第二期の調査計画が検討された。

初日の会議で現地の最新事情を報告したのはクラレンス・グラッケン (Clarence J. Glacken) とダグラス・ヘリング (Douglas G. Haring) である。ともに第1期SIRIで派遣され現地に滞在中であった。琉球列島を構成する4つの群島のそれぞれで人類学調査がおこなわれており、グラッケンは沖縄を、ヘリングは奄美を担当していた。

3-1. 教育問題

グラッケンによれば、沖縄は、占領軍に直面した地域と、軍政の直接的影響を感じさせない地域に分化していた。彼が滞在したのは、沖縄本島南部の農村および漁村と北部の森林地帯の3箇所であり、住民は米軍と接する機会が少なかった。時に移動中の米兵が犯罪を起こすこともあったが、占領にたいする恐怖はなかった。このため、日本復帰が大きな議論を呼ぶこともなく、米国人であるグラッケンに協力的であったという (F1)。

それでも問題と映ったのは学校教員の困窮であった。公教育は日本の国庫補助を失っていたが、米軍からは積極的な補填がない。戦災を受けた校舎の再建が滞っていたばかりでなく、教職員の棒給のための財源を確保することすらできなかった。グラッケンによれば、教員たちは空腹を抱え、憤り、医療費にも事欠きつつ、極端に過酷な労働に耐えていた。彼らが口にする合衆国への中傷に一般住民が敏感に反応する点に彼は注意を促している (F2)。

解決方法は米軍の助成以外になかったが、それが適正に使用されるかは疑わしかった。ヘリングによれば、奄美では公共工事への米軍の援助実績を地元政治家が一般住民に隠蔽していた。教育関連予算を増額しても、学校に届く前に政治家の策略に阻まれる危険性が高い。しかも、彼らの不正操作を摘発するような人員は民生官府には居ない。USCAR本部のある沖縄島から離れた奄美、宮古、そして八重山の各群島に設けられていた出先機関が民政官府 (civil affairs team) である。困窮した教員たちは、反米運動を牽引する共産主義者に変わりはじめていた (F2-3)。学校教員の対偶が、奄美ではより深刻かつ危急な問題となっていたことがわかる。

ここで2人のUSCAR職員が会議に加わっている。

アラン・スミス (Allan H. Smith) は人類学者であったが、対敵諜報部隊

(CIC) 将校として侵攻直後の沖縄に配属された経験をもつ。民間人収容所の保安課長として投降勧告と捕虜の登録をしていた⁶。復員後はいち早く琉球列島の民族誌を志し、民間財団の助成と太平洋学術部会の認可を受けて1947年に八重山群島で妻との共同調査に入る予定であった。しかし、入域許可が取れず、活動開始は1950年まで延期された⁷。9箇月の石垣島調査の後に再び来沖し、1951年7月から民間情報教育局に企画課長として勤務していた。ウィリアム・エルメンダーフ (William W. Elmendorf) は同年9月よりスミスのもとで働いている。彼もまた大学の人類学教員であったが、朝鮮戦争期に軍籍に復してUSCARに配属されていた⁸。開戦時の米軍には日本語を使える人材の準備が無かったため、彼らのような北米原住民研究家はその言語習得能力を買われて極東専門家へと転じるが多かった⁹。

マードックがORO (作戦調査機構) やRAND (研究開発研究所)¹⁰ を紹介しているが、SIRIへの関与が確認できていないのでここでは割愛し、途中参加の2人のために繰り返された学校教員についての議論を追ってみたい。

グラッケンが再述しているのは、教員が共同体内で威信を持ち、沖縄社会の実質的な指導者であるという発見である。一般島民の尊敬を集める教員を無視し、貧困に放置してきたことは、合衆国の名誉を傷つけてしまった。教員に関心を寄せ、彼らが村落の重要人物であることを認識しなければならないという (F4)。

彼の観察では、教員は25歳以下の若手と45歳以上の中高年に別れていた。中間世代が殆ど見あたらなかったのは、もちろん戦死してしまっていたからである。「劇的な経済格差」というのは、中高年の教員が戦前に享受していた安定した生活と、戦後の極度の貧困との落差が、他の職種における収入の変化と比較すると極めて大きいことを指摘したものと考えられる。本来ならば、裕福な農家と同程度の生活が保障されるべきであるというのがグラッケンの意見であった (F4)。

彼の予想では、「冷静で正確な記述が公表されるだけで一気に大問題となる (explosive)」はずであった。この切迫した状況下で、教員を軽視してはならないという警告は、彼らの待遇改善だけではなく、米兵の礼儀にも向けられている。上等兵が沖縄人に乱暴な口調で命令を下しているという場面は簡単に見つけることができた。グラッケンは、教育と文化に関しては、「重大な違いがある」ことに注意を促している。文教関係者についての米琉間の意識の違いは、島民を

して政治的な上下関係を文教領域では甘受させないということであろう。「陸軍はこの問題に傷つきやすい(sensitive)」というのは、米兵の横柄な態度が引き金となって米軍への不満が一気に表面化する危険を指摘したものと考えられる (F4)。

ここから話題は、より一般的な米兵の風紀に移る。引き続きグラッケンによれば、どのような端仕事をしていようとも沖縄人従業員の一人ひとりを家族と村の代表であるとみなさなければならない。日中は襤褸をまとった労務者が、帰宅すれば品位と威信を周囲から認められた人物であるということが往々にしてある。沖縄人にたいする米国人の人種的偏見は強くなかったが、個人の尊厳の重要性を再認識する必要があるという。一方で、沖縄人の側には「黒人を知的に劣る」とする人種的偏見があったという。蔑みや嘲りを理由づけるのにその対象が無教養だからとするのは、教員への敬意と表裏一体をなしたものであろう (F5)。

グラッケンの報告を聞いていたクーリッジは、新規配属兵へのオリエンテーションの有無について尋ねている (F5)。すでに若干の適応指導があったようであるが、会議から2箇月後にはスミスがUSCAR職員に「琉球の人々」という講義をおこなった。歴史への言及が極端に少ない点を除けば、地質に始まり、自然、人種、言語、生業、社会構造、そして宗教をバランスよく簡明に解説している。土地にたいする価値観の違いなど実践的な知識も含むが、包括的な概観を意図したものであった¹⁾。

3-2. 日本復帰に関する沖縄と奄美の温度差

グラッケンが見聞した範囲では、沖縄島では復帰についての論議が盛んではなかったが、それでも誰もが沖縄から離れたがっていた。仮に沖縄人という民族 (artificial nationality) を想定できるとして、その固有の領土を特徴づけるのは、台風被害、戦災、痩せた土地、そして占領軍の活動による騒音や事故・事件という否定的なものばかりであった。終戦から5年以上経っていたが、放出品で身を包むその日暮らしが続いていたという (F6)。

脱出先が日本にならなかったのは、戦前からの海外移民が築き上げた国際的なネットワークがあったからである。世界各地に親戚をもつ島民は少なくなかった (F6)。グラッケンの報告書をもとに作成された政策提言では、偏狭な交際圏しかもたないようにみえる村々にも移民帰りが居るので、海外事情の報道は

正確を期さなければならないと指摘されている¹²。要するに、日本以外にも可能な脱出先が幾つもあり、日本は現実性や利便性を比較されるべき選択肢の1つにすぎなかった。

であれば、米軍施政が「外国人による支配であるかのように感じられていない」というグラッケンの観察は必ずしも意外ではない。戦前期には、東京から派遣された日本人が県庁の管理職をほぼ独占していたことはよく知られている。このような階層化が「外国人による支配」でないならば、日本人官僚が米軍将校に入れ替わった戦後の階層社会もその延長として理解される可能性はあったからである (F7)。

ただし、前にも触れたようにグラッケンの調査地がいずれも米軍施政から離れていたことに注意する必要がある。スミスによれば、占領の受け止め方は世代によって大きく違っていて、新たな環境に置かれた老人たちは文化的な葛藤を抱え、米軍施設に隣接した地域が変化してしまったことに憤っていた。一方で、若い世代は伝統的な社会環境から引きはがされてしまっていた (F7)。そのような世代間ギャップの発生は更に老人たちを憤らせたはずである。

奄美の情勢は沖縄とは大分異なっていた。奄美でも住民は島から離れたがっていたが、希望する行き先の筆頭は明確に日本であった (F11)。ヘリングの調査報告によれば、各地に広がった沖縄移民とは象徴的に、戦前の奄美移民は日本と満州に集中していた。沖縄人ばかりでなく総体としての日系人が多かったハワイですら、奄美出身者は1人しか確認できなかった¹³。移民先の候補に南米があがることもあったが (F11)、沖縄人が抱いていたような現実感を共有できていたかは疑問である。

また、奄美には目立った戦災や基地公害が無かった。戦場となり壊滅的な打撃を受けた後に基地が乱立した沖縄本島ほどは生活環境が悪くはなかったはずである。それでも島外脱出の希望が高まったのは、目前の生活苦よりも、近い将来の法的地位が不満の原因となったからであった。

奄美の住民が嫌悪したのは信託統治である。琉球列島の戦後処理を確定した講和条約第3条では、米国が信託統治を国際連合に提案したときに日本は無条件に同意するが、提案がなされ可決されるまでは米国が司法、行政、そして立法の全権を行使するとされた。当時すでに実現の見込みがなかったといわれるが、

明文化された限りでは唯一の将来像であった。再独立する日本への再統合がむしろ当然と予想されていたこともあって当初は穏健な請願に過ぎなかった運動が、1951年7月に信託統治案が発表されると一気に大規模な大衆抗議に発展した¹⁴。

「信託統治」という耳慣れない語が「情け容赦のない帝国主義的」支配であると憶測されていたことをヘリングは観察している（F11）。日本語では、国際連盟時代の委任統治と紛らわしく、植民地統治とも混同されることがあった¹⁵。条約が締結されても具体的な政策が公表されたわけではないから、現地のみ軍は信託統治下の島民の生活がどのようなものになるか詳細な説明を与えることができなかった。更に、島民の混同につけ込んだ反米活動家は、誤解を助長するような扇動を繰り返していた。「信託統治が施行されたら全島こぞって日本に渡る」（F11）というのは、奄美の復帰運動のなかで繰り返し叫ばれた不退転の意思表示である。

3-3. 奄美における緊急世論調査

加熱する抗議行動の動因を解明するために緊急におこなわれたのが、スミスが言及している世論調査（F11）である。講和会議が開催中の9月初旬に奄美でおこなわれた。スミス自身も監督として同行したが、実務の中心となったのはSCAPの世論・社会学調査部にいたイワオ・イシノである¹⁶。第1期SIRIで意識調査機関を設立する任務を受けて来沖中であつた。USCARの主要な関心は、デモや集会が自発的な大衆運動であるのか、一部の政治家や共産主義者の策謀であるのかを見極めることにあつたという¹⁷。

集団面接方式で1171名から得た回答の概容は以下のとおりであつた¹⁸。

まず、復帰希望は全回答者の99%に達していた。復帰後の心理的および経済的な利得を狙ったものではなく、日本との紐帯を根拠にした主張の正当性が主な理由であつた。4割以上が半年以上の日本滞在経験をもち、日本に親族をもつ者は、奄美以外の琉球列島に親族を持つ者よりも圧倒的に多かつた。

復帰の適時については、講和会議が唯一の機会と考えられていたこともあって、即時復帰の願望が強かつた。当時の日本政府は奄美の戦後復興を賄うような財政状態にないという現実的な問題は考慮されないことが多かつた。

このような日本志向と表裏をなしたのは、沖縄など琉球列島の他の島々から

の差別化である。9割弱の回答者が、奄美住民にとっての日本復帰は、他の島々の住民にとっての日本復帰とは比較できない特別な問題であるとした。人種的あるいは文化的に日本に近い、または行政区分上は完全に日本であったという理由があげられた。しかし、最も多いのは、沖縄のように米軍による侵攻を受けたこともないし、その後に米軍施設が建設されたわけでもないという理由であった。

復帰後の生活向上を予想する回答は半数に過ぎなかったが、信託統治下の生活は不満足なものになると予想する回答は84%であった。信託統治の施政権者に相応しい国の選択では、選択自体を拒む者も多かったとしても、米国とする回答が過半数を越えていた。したがって、信託統治への不満は直接的な反米感情ではなく、植地的な圧政や搾取を信託統治という語に読み込んだうえでの感情的な反応と考えられるという。

以上は、スミスとエルメンダーフがイシノの集計結果に分析を加えた最終報告による。SIRI会議の席では、USCAR職員の2人だけが集計結果を熟知していたため、概容が紹介されたと考えられる。「客観性が確かめられた」(F11)としているのは、量的社会調査の手続きを踏んだことを指しているのであろう。関敬吾と桜田勝徳という2人の民俗学者に加え、統計数理学研究所の水野担をイシノは随伴していた。若い応用数学者であったが、戦後の日本で大手新聞社が頻繁におこなった世論調査の設計を一手に引き受けていた¹⁹。

けれども、この世論調査には疑義を挟む声もあった。ヘリングである。ひとつの理由は、質問票による意識調査という方法への不信であり、「人は期待された答えを答えるものだ」と指摘している。いま一つは、世論調査が普及しておらず、思想調査への警戒心が強い社会でそれが正しく機能したのかという懸念であった(F8)。では、イシノやスミスと入れ替わりに奄美に入り、人類学的現地調査をしている最中であったヘリングは復帰運動をどのように理解したのであろうか。

3-4. ヘリングの奄美調査

現地ではヘリングが知ったのは、「復帰デモに殆ど興味がない」(F10)人々の存在であった。彼らは米国の援助に感謝し、最終的には米国が正義に則った行

動を取ることを信じていた。自身が米国人であることが対面状況で与える影響を考慮しても、米国への信頼は確かなものにみえたという²⁰。

ただし、このような親米的な態度は、エルメンダーフの発言が示唆するような離日的な意識の表出ではなかった。エルメンダーフは在沖紙の論調が復帰反対である点を指摘し、復帰運動の始点は、領土的プライドを保ちたい日本の扇動にすぎないとみている (F9)。ここで指摘されている『琉球新報』は、沖縄民政府副知事で直ぐ後には那覇市長となる又吉康和が社長の時代で、「日本復帰は時期尚早」を主張していた²¹。

ヘリングによれば人々の復帰願望に疑いの余地はなかった。薩摩藩による植民地的搾取にあった島民にとって、明治維新とは奴隷状態からの解放を意味する。人間の尊厳と近代文明を与えた「日本は自由と進歩の象徴」であるから、「復帰は不可避」であった²²。彼の出会った人々も「最終的には日本に戻る」と信じていた。ただ、経済的困窮という日本の現状を冷静に受け止めて、「急ぐ必要はない」と考えているに過ぎなかった (F10)。

このような冷静な島民が米国批判を避けて復帰運動から身を引いたため、反米運動を推進する共産主義者たちが、奄美と日本の権益を守る愛国者であるかのように振る舞うことになったヘリングはみている²³。彼によれば、復帰運動とは、奄美を対米擾乱の要所とした共産主義者が問題の焦点をはぐらかすために扇動したものであった。ただし、一般島民の目に彼らの本心は明らかであり、少なくとも1952年初頭の時点では、運動の指導者たちは不信の目で見られていたという (F10)。

復帰「願望」が日本との心理的同一化の必然的結果であったとしても、復帰「運動」がそこから自然に生まれるものではないならば、打つ手はあったはずである。「奄美民政官府はどの程度の力をもつのか」というクーリッジの問いはこの点に向けられたものである (F9)。

状況は深刻な人員不足であった。奄美民政官府には軍人と民間人それぞれ6名ずつしか配置されていなかった。これだけで奄美群島25万の住民を管理していた。「奄美人が奴隷化される」といって共産主義者が恐怖を煽ったが、米国人の目には「笑ってしまう」ほど非現実的であったはずである。民政官府の力不足のため、現地の政治家の不当行為が明らかであっても効果的に対処できな

いという従前の指摘をヘリングは繰り返している (F12)。「忘られた島、奄美」(F13) というのは、日本からの棄民意識に苛まれた島民の嘆きであるとともに、当地の民政官の嘆きでもあったのだろう。

人員不足は量的な問題ではなかった。奄美での情宣事業をクーリッジが提案すると、ヘリングは「アミオカ大尉」を担当候補にあげている。日系人であろうから、「読んだり話したりできる人物」(F16) というのは日本語について言っているとみて間違いない。言語の障壁は調査報告書で彼が最も問題視した問題である。英語で読書ができる住民は島内に12名以下であるのに、民政官のなかには日本語を使える者が誰もいなかったという。極めて少数の人間が、殆ど言葉の通じない膨大な数の人間を統治していたことになる。東京で伝教経験をもつヘリングは呆れたに違いない。彼の勧告は、民政府と琉球軍への組織的な日本語訓練にとどまらず、現地人が評価する日本語能力を基準とした職員の新進や採用までも求めていた²⁴。人事評価はともかく、上下関係を無視し、言語能力をネイティブに評価させるというのは戦時の言語教育で採られた方法である²⁵。

3-5. 先島の復帰意識

グラッケンとヘリングによる最新事情の報告は、日本からの分離にたいする反応が地域によって大きく異なることを浮き彫りにした。マードックは「2つの問題に分けて考えるべきではないか」と問い、「奄美を今すぐに返還し、沖縄は暫く保持する」ことを提案している。もちろん、SIRI会議の参加者たちには外交方針を検討する責任も権限もなかった。しかし、主席民政官のジェームス・ルイス准将が同意していたと付記されていることを鑑みれば、現地の意見として、より上位の機関へ具申された可能性は否定できない (F13)。

では、残る2つの群島はどのような状況にあったのだろうか。宮古群島の調査担当者が列席していなかったので、マードックの質問は八重山群島に絞られている。応答は、石垣島調査の経験者であるスミスであろう。八重山住民は「『フィリピン』と同じ処遇を期待」していた (F8)。1946年のフィリピン独立は、10年間の猶予を条件に1933年に決定されていた。第二次世界大戦を挟む国際情勢の大きな変化にもかかわらず、米国が属領との約束を履行したことは高

く評価されていた。八重山でも一定の移行期間の後に独立を与えられることを期待しているという報告であろう。

八重山と沖縄の関係を、奄美と沖縄の関係にカーが類比していること (F10) から推察すれば、独立の単位は琉球列島全体ではなく群島であった可能性が高い。昼食時にヘリングが話題にした「奄美と沖縄の間にある文化的境界線」にカーは関心を示していた (F19)。八重山と沖縄の間にも「文化的境界線」があると理解したのであろう。実際に、終戦直後には八重山や宮古で群島単位の共和国構想を抱く者が出たことが知られている。後に編纂する琉球史のなかでカーは、これら先島の人々にたいして首里や那覇の人々が優越感を形成した歴史的関係を解説している。彼によれば、中国人や日本人が軍事的経済的な権力を背景に沖縄人を無粋な野蛮人とみなしてきよくに、その沖縄人は先島人を社会的にも知的にも劣った「田舎の従兄弟」とみなしていた²⁶。

以上で、最新事情の聴取の様子をほぼ再現した。「宮古、八重山、奄美では占領の影響が殆ど無く、[沖縄の]基地周辺部でのみ強い」というマードックの言葉 (F16) は初日の会議を総括するものであろう。政策提言を重視する立場からは、この点をはっきりと確認しておく必要があった。翌日の会議で彼は沖縄島の特定地域における実践的な調査を強く主張し、周辺群島の学術的な調査にも関心を広げる他の参加者を抑えることになる。

3-6. 琉球史教育

初日の会議の話題としてもう一点触れておかなければならない。琉球史教育に関する議論である。

奄美での広報活動が失敗していることを知ったクーリッジは、民政官府の常勤職に人類学者を勧告する提案をしている (F14)。彼の脳裏にはCIMAの成功があったことは疑えない。旧南洋群島における米海軍の施政を支援するために、3箇年に42名の人類学者、言語学者および地理学者がミクロネシアに派遣された。成果は高く評価され、事業完了とともに民政府に数名の人類学者のポストが設けられていた。

人類学者が一般に示すような「現地の人々と文化への好意的な関心」(F14) の必要はヘリングが強く訴えていたことであった。彼によれば、稚拙な英語と

粗末な服装や簡素な住居が米兵の間に島民への偏見を生んでいた。島民蔑視は交流を阻害するばかりでなく、「奴隷化」を叫ぶ共産主義者の扇動を裏書きしてしまう危険があった。アメリカ化を促進するような広報活動は、画一的な愛国心を強要して現地の習慣や歴史を抑圧した日本軍国主義と同一視される危険もあった。民政府に土着文化局を設置して郷土芸能の振興を図ることをヘリングは勧告している²⁷。

そこから更に一步踏み込んだのが琉球史教育の提案である。「1946年まで琉球史の授業はなかった」と指摘したスミスに応じて、クーリッジが適切な教材を具体的に尋ねている。他界していた伊波普猷（1876-1947）はもちろん、島袋全発（1888-1953）と東恩納寛淳（1882-1963）も当時から琉球史の重鎮であった。

日本人との差異としてヘリングは「軍国主義（militarism）と軍隊（the military）への不信感」（F15）に言及している。彼によれば、平家の落人が伝えた平安文化を源流とし、薩摩藩による植民地化で江戸文化の流入が遮断されたのが奄美文化であった。この文化伝播のあり方は、一方で、奄美が日本文化圏に属することを保証するが、他方では、徳川幕府の長い治世によって後々までも日本人を拘束した倫理観や行動規範の欠如をもたらしたという²⁸。「軍国主義と軍隊」というのは、近代国家のそれも含まれようが、むしろ「武士道と侍」を指して言ったもののように思われる。

ただし、日本との差異を強調することが占領という現状の肯定になるといった短絡的な意見をヘリングは述べているのではない。彼が郷土史を推奨するのは、棄民意識に囚われた島民が自尊心を回復するのを促すためであった。自失して道徳心を忘れた人間は反社会的な誘惑に容易に嵌るようになるという危惧からである²⁹。確かに目的は施政権分離の維持にあったが、共産主義者の扇動を防ぐことを主眼とした提言であった。

4. 次年度事業計画

2日目午前中の会議は第2期SIRIの事業計画案の検討が中心であった。参加者は太平洋学術部会顧問団のクーリッジ、マードック、そしてカーの3名、SIRI派遣研究者のグラッケンとヘリングの2名、USCAR民間情報教育局のスミスとエ

ルメンダーフの2名までが前日と同じ顔ぶれであるが、同局職員のハークネス (Kenneth M. Harkness) とアンドラーデ (Harrison Andrade) が加わった (F20)³⁰。

4-1. USCAR職員教育

本題に入る前にUSCAR職員の教育が議題になり、マードックとクーリッジ、ヘリング、そしてスミスがハンドブックの改訂を強く訴えている (F21)。『琉球列島民事ハンドブック』は戦時中に作成されたため開戦前の古い資料にもとづいていた³¹。情報入手の困難に時間的な制約も加わり、明らかな錯誤も少なくない³²。作成者であるマードックや、これを指針に現地調査に臨んだヘリングやスミスは問題を痛感していたはずである。

改訂のための資料は、従来どおり、マードックが開発した通文化概観ファイルが予定されていた (F20-21)。すでに1949年にはイェール以外の大学が参加するコンソシアムすなわちHRAF (Human Relations Area Files)へと発展していた。琉球ファイル一式をスタンフォード大学とUSCARにそれぞれ置くことが提案されている (F21)。

他の重要な参考資料には東京のSCAP民間情報教育局の資料があった。講和条約発効を間近にひかえ、占領中に収集あるいは作成した資料の処分問題が浮上していた。USCAR民間情報局の一時的貸借、あるいは琉球大学へ移管したうえで同局に預託という方法が提案されている (F21-22)。民間の研究機関で永久保管するのが望ましいとしても、米本国に移送されてしまえば、USCAR職員が容易に利用できなくなってしまうからであろう。

HRAFの設置についてアンドラーデの質問、琉球大学の機材についてのスミスのコメント、「スタンフォード企画第1号」へのマードックの言及は、沖縄に設置される参考資料の検索用文庫に関する発言であったと考えられる (F22)。すでに触れたように、来沖にあたりカーが持参したのは「USCAR業務支援のためのドキュメンタリー・プロジェクト」であった可能性が高く、これはフォーバー研究所で予め策定されていたものであった。少なくとも8本の調査を含むシリーズ企画であったが、「企画第1号」とあるのは、カーの調査がその筆頭だったからであろう³³。

4-2. 第2期SIRI案

ここで、民間情報教育局の第2期SIRIの事業計画が紹介されている（F23）。

- I. 村落調査（伝統的な共同体の民族誌）
- II. 戦後の変化にさらされた共同体の社会・文化研究
- III. 社会心理学的研究

これら3本の調査案は、前年11月に民政官に提出された勧告に迎えることができる³⁴。企画課長であったスミスが立案したものであろう。会議の席で彼は、考慮した条件として、予算、調査地、目的の3点について説明している。

まず、「どのような事業であれ今年度は認可が難しい」（F23）というのは、SIRIの財源であった占領地救済政府資金（GARIOA）の急激な縮減によって予算確保が困難になっていたことに言及したものである。後に触れるように代替資金の模索が始まるが、当面は「事業数を極力削減するように指示」（F24）されていた。

次に、「陸軍の関心は沖縄島だけ」（F23）であることから、調査地が沖縄に限定されることになった。上記の11月の勧告の際には、加えて、人類学調査報告の不在も沖縄を選択する理由となっている³⁵。スミスの個人的な石垣島調査を含めれば、八重山、宮古、奄美という他の3つ群島については文化人類学者による民族誌調査が一通り済んでいた。第1期SIRIの担当者のうち、沖縄に赴いて土地使用制度を調査したグラッケンのみが地理学専攻である。

困難が予想されるなかで認可を取り付けるには陸軍の要望に極力したがう必要があった。それでもスミスは学術的貢献を含めた「二重の目的」（F23）を狙っている。

これにたいして、より露骨に緊急実践課題への専念を説いたのがマードックであった。侵攻前後の軍政計画の中心にいた彼は、琉球列島の戦略的価値が、厳密に言えば沖縄のそれであることを熟知していたはずである。大規模な軍事施設は、沖縄島と、これに近接する伊江島に集中していた。沖縄での政策課題に直接対応する調査に限定するべきであるというのが彼の意見であった（F23）。

他の参加者の見解はスミスに近く、学術的な関心が先行する彼らの提案にマードックが批判的にコメントを寄せるという遣り取りが連続している。

まず、比較の対象として日本人による研究が提案され、日琉間の差異と類似

の弁別にクーリッジが関心を示す。しかし、マードックは、復帰運動対策に配慮すれば、日本人学者の導入は問題があると応じる (F25)。日本人人類学者を名目上は通訳として使用すればよいというハークネスの妥協案に対しても、日本人の影響を避けるべきであり、最も確実な手段として彼らに関与させないことを再度確認している (F26)。

新たに日本人の言語学者を育てるというヘリングの提案に対しては、実践的な価値がないという理由でマードックは反対する。言語学的研究はせいぜいのところ学術的な意義しかなく、陸軍へ提供する業務には不適切であるという。ただし、陸軍が資金提供する調査事業でなくとも、移動や運送などの支援は受けられるという推測を付言していることから、SIRIの枠外での実施を示唆したのであろう (F26)。

マードックはまた考古学や博物館にも冷淡であった。沖縄島の貝塚と与那国島の発掘が提案され、スマスとクーリッジが具体的な方法について意見交換している。与那国に関して「台湾と宮古の絡み」(F27)とあるのは、台湾に隣接するこの島が16世紀に宮古勢力に侵攻された歴史的影響をいったものであろう。ハークネスの「沖縄博物館設立の動き」というのは、首里(当蔵町)博物館に言及したものである。戦後初の本格的な収蔵施設の着工は丁度SIRI会議の翌月のことであった。資金不足で難航したが、米琉交流を顕彰するペルリ記念館の並置によりUSCARの助成を受けて竣工にこぎつけることになる。しかし、彼らを戒めるかのように、「現在の文化とパーソナリティの研究こそが必要」とマードックは応じている (F27)。

参会者のなかで最も発言力があつたのがマードックであるとみて間違いない。クーリッジやヘリングの方が年長ではあつた。しかし、動物学者のクーリッジは太平洋学術部会の人類学業務についてはマードックの「代弁者」と揶揄されるほど彼に従っていた³⁶。また、伝道師あがりで教職に就いたヘリングには、マードックと比較できるような学会での政治力はなかつた。琉球列島に関する知識においても、『民事ハンドブック』を編集し、沖縄軍政府で住民担当部局を率いたマードックは優位にあつた。彼に唯一欠けていたのは直近5年間の知見である。このため、現地滞在者の報告でこれを補うと、彼が次第に会議をリードするようになった。

文化とパーソナリティ研究を重視する点でヘリングはマードックに賛同していたが、彼は奄美での実施を望んでいた。日本と沖縄の中間点であり、復帰論を研究する土台となることを狙ったものであった。しかし、「同一人物が2箇所の研究にあたるべきである」というマードックの主張は、奄美と沖縄を指したものではない (F28)。提案された3本のうち社会心理学的研究を独立した調査としないで、伝統村落と、変化する村落の調査に含め、沖縄で実施するという提案であった (F24)。

これに従うように、心理学的専門性をどう確保するかという検討にスミスも転じた。医学系の専門家の協力が必要であり、陸軍所属の臨床精神科医などに選考の目が向けられている (F28)。

日系二世が推されていることから、追加条件として言語能力が求められたこともわかる。ただし、スミスの要求は単なる日本語力ではない。彼によれば、外部の人間に対する以外では島民は日本語を使わず殆ど常に現地語を使っていた (F28)。日本語は島嶼間コミュニケーションのためのリンガ・フランカに過ぎないというのは、石垣島調査以来の彼の持論であった³⁷。「日本語会話への熱意を冷ますことが前提である」(F29) というのは、父祖の地に配属された日系軍人にそのような傾向が強かったことを示唆する。

5. 局長への報告

19日午後の会議には、第1期SIRIの派遣研究者として奄美を調査中であったヘリングが抜け、ディッフエンダーファー (H. Earl Diffenderfer) が加わっている。軍政府時代から民間情報教育の中軸となり、草創期の琉球大学に深く関わった人物である。一方で、基金を創設して財政難の大学の維持に努めたが、他方で、学生運動にたいする弾圧の前面に立ったことで知られている。午後の会議は、先の2つの会議の要点を彼に伝え、あわせて予算について検討するという内容である。

5-1. 資金調達問題

第2期SIRIの目的が確認された後で、ディッフエンダーファーが「ガリオア

資金の供与期間中に即座に利用する」と述べているのは、予算執行の制約について注意を呼びかけたものである。陸軍省と全米学士院の間にSIRIプロジェクトの契約が結ばれたのは1951年4月であった。実際の業務期間は、遡って同年年始から翌1952年末までの2箇年とされた³⁸。しかし、会計年度上は1951年度と1952年度ということになるため、当初の契約に変更を加えることなく予算を執行できるのが「1953年6月まで」であった（F31）。

当初予算は総計10万ドルであったが、第1期の事業で9割近くを消化してしまっていた。海軍との契約にもとづいてミクロネシアで展開していたCIMAと同額であるから、取りあえず先例を踏襲したのであろう。SIRI事業が開始されたのは丁度ガリオア援助の膨張期であったから、追加予算を期待していたはずである。琉球列島のガリオア援助は生活物資の供与が中心であったのが、1950年度に救済から復興へと目的が転換し、援助額も前年の倍近い5200万ドルへと急増した。翌年度も4,000万ドル弱を維持するが、1951年秋の米議会で大幅な縮減が決まり、1952年度実績は一気に1,500万台に戻ってしまっている³⁹。継続調査の経費をどう捻出するかという問題（F31）との関連で、OROへの言及もあったのであろう（F32）。

世論調査に関する議論（F34）では、意識調査機関の維持についてスミスとマードックの意見が対立している。奄美の緊急調査に労力を割かれたが、GHQから派遣されたイシノの本来の任務は意識調査のための現地機関を設立することであった。面談者の訓練と、報道および学校関係者の啓蒙をおこない、ラジオ視聴や文化センター利用状況などを月例でモニタリングする準備が整えられた。民間情報教育局に専門家を新規採用する予定であったが、USCAR民間人職員の雇用財源であるガリオアが縮減したため不可能となった。機関自体の存続をも危ぶんだイシノが画策し、企画統計課の余剰人員を流用することになっていた⁴⁰。太平洋学術部会が専門家を派遣すべきであるというのがスミスの意見であったが、マードックは、世論調査は、学術部会の趣旨に合致しない「一般業務（service job）」であるとして反対している。

5-2. USCAR人類学顧問

運営資金の調達が困難になるなかでマードックが提案しているのが大学院生

の派遣である。大学の研究助成で学生を現地調査に赴かせ、移動や事務機器の支援だけを軍から受けるというやり方であった（F35）。支援にかかった費用は大学から返済されるので、財務上は軍が失うものはない。それでも研究者側に利点があったのは、軍が関与することで活動への制限が緩和されるためである。公共交通機関が未整備の島で軍の便宜は不可欠であった。一般業務用のジープですら慢性的に不足していたため、SIRI調査者への貸与がUSCARで問題になったこともあった⁴¹。マードックによれば、大学院生が調査活動の支援を受け、見返りに軍は情報提供を受けるという方法は「一石二鳥（double productivity）」であった。

マードックの発言からは、この線で海軍との交渉が始まっていたことがうかがえる。CIMA完了後のミクロネシア研究の継続を画策していたのであろう。琉球列島では1953年になってマレツキがこの方式で現地調査をしている。イエール大学でマードックが組織した「育児とパーソナリティ」研究の一環であった⁴²。

マードックとは異なり、クーリッジやスミスは、もっと成熟した人類学者を求めていた。クーリッジは人類学者の常勤職を再び提案しているが、ガリオア援助の縮減の結果、USCAR職員の新規採用案は凍結されていた。「リーバンを那覇の民間情報教育局本部に呼び寄せる」という代替案をディッフェンダーファーが出している。リーバン夫妻のうち妻（Ruth W. Lieban）は当時すでに民間情報教育局のラジオ放送課長であったから⁴³、夫（Richard W. Lieban）に言及したものである。彼は会議と同月から民間情報局勤務となり、8月にスミスとエルメンダーフが去った後も人類学的な調査活動を同局で続けている。スミスは、例えばミード（Margaret Mead）のような学者を上位機関の顧問職に迎えたかかったようである（F35）。

その他にディッフェンダーファーを前に改めて確認されたのは、奄美における緊急調査の結果と意義の説明、世論調査一般の確実性についての議論、そして沖縄人像に関する議論である（F34）。

6. おわりに

本稿を結ぶにあたり、校訂および注釈の過程で目に付いた点を指摘して、続稿への繋ぎとしたい。

初日の会議で繰り返し報告されたのは学校教員の劣悪な待遇である。それが将来の火種になるという警告は杞憂ではなかった。実際に、沖縄教職員会が先導する復帰運動により米軍統治はやがて揺さぶられることになるからである。この警告が軍用地問題の表面化する以前に発せられていたことには注目しておきたい。どのような対策が講じられ、どのような点でそれは不十分なものにとどまったのか、今後明らかにされなければならないであろう。

翌日の次年度事業計画の検討の様子からは、学術的潮流としての「文化とパーソナリティ」研究への関心が継続していたことがわかる。その実践的な価値への信頼も揺らいでいない。学校教員の社会的地位についての琉米間の相違に注意が向けられているが、SIRI報告書を見ると、子弟教育への高い関心は、表面的な時間のルーズさなどとともに、「家族」中心主義あるいは集団への忠誠によって説明されていることが多い。実業重視、時間遵守そして個人主義という米国社会の特徴とされるものと対比された島民社会の特徴であり、オリエンタリズム的な構図に沿った描写である。それでも、職業軍人にとっては、学術専門家を介さなければ入手できない知見であったようである。

一方で、日本本土との差異や琉球列島内の多様性も注目されている。

後者について先に述べると、日本復帰に関する奄美と沖縄との温度差や、沖縄本島内における基地周辺の生活の特殊性の指摘である。これが奄美群島の早期返還に一定の影響を与えたことは疑えない。しかし、近年の現象に限らず、例えば八重山群島での調査からミスは、言語などの基本的な文化要素についても「日本国内の多様性を越える驚くべき多様性が列島内にある」と述べていた⁴⁾。日本人であれ琉球人であれ戦前期の民族誌家は関心を殆ど示さなかった点である。1960年代になって長期滞在した日本人教授が言及し、施政権返還前後の社会運動のなかで注目されるようになる。影響関係の有無とは別に、琉球列島内の文化的多様性を訴える言説の系譜に正當に位置づける必要があるだろう。

日本本土との差異は、米軍統治が日本施政権からの分離を前提としていただけ

により重要な論点である。列島内の多様性を強調していたスミスは、厳密に言えば矛盾するのであるが、「人類学的に琉球列島は、台湾や中国はもちろん日本からも離れた独立した単位として研究されなければならない」と断言してもいた⁴⁵。琉球史教育の不在を彼が指摘したのは、日本史からの独立を訴えたとみて間違いない。もちろん、戦前・戦中にすでに琉球史は書かれていたが、例えば琉球王国の海外貿易を日本軍の東南アジア占領の先例とするような史観⁴⁶に立脚していた。したがって、スミスの指摘の直後にヘリングが「軍隊や軍への不信感」に言及しているのは、新たな琉球史観を示唆したものと考えられるべきである。今日まで続く「平和愛好の民」という琉球人像の一つの原点であったのではないだろうか。

琉球史と離日政策との結びつきがあからさまなのは2日目の会議の終盤である。「期待できる沖縄人の素性」が、「日本人とは別個の人々としての沖縄人」のそれとして議論されている。前日は、軍事主義あるいは武士道の評価について琉球人は日本人から「はっきりと分化している」とヘリングが発言していた。しかし、そこで彼は、島民の自尊心の回復を主眼に置いて郷土史を推奨していたのであって、最終報告書などからは彼が離日の誘導には極めて懐疑的であったことがわかる。その彼は19日午後の会議には出席しておらず、微妙だが重要な論点の差異は無視されてしまったようである。

いずれにせよ、会議でのこの発案に従って琉球史を書くことになるのはカーであった。主席民政官から執筆依頼を受けたと述懐しているが、確かに、彼の筆録には、琉球史教育が話題にのぼっても反応を示した形跡がない。おそらくは1月25日におこなわれた第2期事業計画の全体的な調整会議の席で決定されたのであろう。「ドキュメント・プロジェクト」の資料収集計画に急遽大幅な修正を加えて作成した琉球史編纂計画書は29日に提出されている。そのカーの琉球史が果たしてどのようなものとなったかについては、準備中の別稿で改めて論じたい。

7. 1952年SIRI会議ジョージ・カー筆録

以下に掲載するのは沖縄県公文書館が所蔵する個人文書「G. H. カー文書」中の琉球史編纂に関する資料に含まれるカーの筆録（OPA GHK1D01002）である。時系列順の7枚目まではカー自身による2頁のタイプ清書がある（OPA

GHK1D01001)。頁末まで記入されているため、途中で清書を中断したものか、すべて清書したのに3頁以下が散逸したのかは確認できない。この2頁分を除いて、冒頭に断ったように校訂作業はすべて筆者の推測によるものである。

シートに付された番号は沖縄県公文書館が保管している状態を示している。一見してわかるように順番が前後しているが、これは判読の結果を踏まえて筆者が入れ替えたためである。日付や時間の記録から、束ねられた用紙が時系列を為していないことは明らかであるが、筆者の推測が本来の順番をすべて正しく再現できているという確証はない。校訂史料を読むにあたっては、この点に留意されたい。

(folio 18)

Fryday 18th 9 a. m.

Col[onel Kenneth W.] FOSTER, Col[onel Richard] STILLMAN.

Anthropology/ Public Health/ Natural Resource section/ 16 人, 1951

Progress, field final Reports prepared.

Evaluation + Budget considered before I [(first)] year period.

National Academy of Science - National Research Council.

(folio 19)

Lunch, Friday, 18th.

[DOUGLAS G.] HARING, [CLARENCE J.] GLACKEN, [ALLAN H.] SMITH, [WILLIAM W.] ELMENDORF, etc.

SMITH:

Yaeyama: Hospitals/ (ice cream freezers; civil administrators)

HARING:

Amami, afraid of trusteeship—cultural line between Amami + Okinawa.

(folio 1)

p.m. 2: 20, Sukiran [(瑞慶覧)].

HARING, GLACKEN, [HAROLD J.] COOLIDGE, [GEORGE P.] MURDOCK, [GEORGE H.] KERR.

GLACKEN:

Reversion not an issue in his village, little or no fear./ Villages not directly conscious of occupation + military gov[ernment]./ Two worlds: Presence of import stores important./ Preemption of land is pretty local.

People's willingness to cooperate with **GLACKEN**, pretty good attitude./ Afraid of soldiers going through villages occasionally.

(folio 2)

GLACKEN:

Poverty of school teachers—shameful comment on USA./ Natives sensitive to them./ Neglected teachers not yet turning pink (as in Amami)./ Teachers hungry, in rage, no medical care. Hard working.

HARRING:

Politician will not let budget raise reach teachers./ Only an American subsidy would help. Should be known if provided./ Amami politicians keep knowledge of aid from people. People don't know.

(folio 3)

GLACKEN:

Politicians not so important.

HARING:

Civ[il] Ad[ministration] don't have personnel to check into losses among politicians.

Importance of schools in community.

SMITH, ELMENDARF arrived.

ORO program explained. (ONR, Rand) Operational Research Organization.

(folio 4)

GLACKEN:

Stresses importance of school teachers, prestige, etc, and damage to US prestige.

Teachers as key people in villages./ Division:/ a. group 20-30 age./ b. group 45 plus./ few in the central range.

drastic economic inequality. Should level with prosperous farmer./ explosive problem if a dispassionate or objective study were published.

Army sensitive to issues. Example, a pfc [(private first class)] ordering Okinawans around roughly.

(folio 5)

GLACKEN:

each employee represents a family and a village./ May be a ragged laborer in daytime; a man of dignity at home./ Must impress on Americans the importance of the dignity of Okinawan individual.

Racial prejudice toward Okinawans not great./ Okinawan prejudice against negroes "lesser intelligence."/ Okinawan note discourtesy or abuse in terms of lack of education.

COOLIDGE:

is there any orientations course for Army?

GLACKEN:

Some; should be impressed upon Army.

(folio 6)

GLACKEN:

Reversion issue, not strong in Okinawa but everyone wants to leave Okinawa. [What] affects idea of artificial nationality for Okinawans:/ a. typhoon damage./ b. war damage./ c. poor lands./ d. destruction of the peace./ Hand-to-mouth existence, clothing mostly cast off army.

Cosmopolitan relationship, relations everywhere overseas./ Provincialism plus knowledge of overseas.

(folio 7)

GLACKEN:

Don't feel as if this were a foreign domination, (yet).

Hostility toward stratification of society under Japan.

ALLAN [SMITH]:

Much in attitude depends on age, cultural conflict with older generations:

Older people more resentful of change in areas of maximum contact,/ younger people drawn out of old context.

(folio 11)

HARING:

People of Amami want to go to Japan—Get out, move to Japan./ Elsewhere want to go to S[outh] A[merica].

ELMENDORF:

Strong reaction to "Trustee Idea"—"If Trustee were imperial without mercy," all will abandon Amami *en masse* for Japan.

ALLAN [SMITH]:

On poll re[garding] reversion in Amami, testified to objectivity.

(folio 8)

ALLAN [SMITH]:

Gen[era]l LEWIS appreciated SIRI projects.

HARING:

100% for reversion, but [""] people think what they believe they are expected to think."/ Doesn't think much of opinion polls in Japan/ habitually suspicious of poller.

M[URDOCK]:

Amami high Reversion./ Okinawa not active./ Yaeyamans?

Expectations of "Philippine" treatment.

(folio 10)

ELMENDORF:

Ryukyu Shimpō./ Anti-reversion.

KERR:

Yaeyama ⇔ Okinawa as Amami ⇔ Okinawa.

HARING:

Some Amamians feel that ultimately go back to Japan—why hurry ?/ Little interest in Reversion demonstration./ Leadership of reversionist movement mistrusted./ Anti-reversionist leaders.

(folio 9)

ELMENDORF:

Japan initiated reversionist's agitation (territorial pride).

HARING:

Communist see importance of Amami as commotion center./ Prefer to keep attentions diverted./ Did stir up reversion.

COOLIDGE:

How effective is the civil affairs team in Amami?

(folio 12)

HARING:

Only 1/2 doz[en] in uniform (not armed), 1/2 doz[en] civilians./ 250,000 人/
Team not active./ Communist propaganda laughable, "enslaving Amami people."

Some abuse of aid on local scene—local grafters./ American part in
reconstruction concealed by politicians./ Need better accounting but Americans have no
authority.

(folio 13)

HARRING:

Team members frustrated unable to act in face of graft among politicians./
"Amami forgotten isle."

SMITH:

Same in south. Miyako, Yaeyama.

MURDOCK:

Should we split this into 2 problems—Revert Amami now, keep Okinawa for
sometime./ (Gen[era]l LEWIS agrees).

(folio 16)

MURDOCK:

Influence of administration negligible./ Miyako, Yaeyama, Amami./ Strong
only in area of bases.

COOLIDGE:

suggesting for information program for Amami?

HARING:

Some one who reads and speaks outside official hierarchy. Captain AMIOKA.

(folio 14)

HARING:

Commies twist the Amami people as people without country—not Japan, not
America.

COOLIDGE:

Should we recommend an anthropologist as a permanent member of the team?

HARING:

Appreciation of interest in local people and culture.

SMITH:

No Ryukyu history taught in schools till 1946.

(folio 15)

COOLIDGE:

What materials from Ryukyu history?/ IHA [(伊波普猷)], SHIMABUKURO
[(島袋全發)], HIGAONNA [(東恩納寛淳)].

HARING:

Distrust of militarism and the military
clearly differentiate.

CIC [(Counter-Intelligence Corps)] total waste.
uranaï = fortune teller—redaction—superstition.

SMITH:
CIC, ineffective youngsters/ "cops + (?)"

(folio 17)

SMITH:
Lack of coordinating unit in public opinion survey./ Public opinion? specialist need[ed], doubtful if such a slot be secured.
Listed men in organization who seem to appreciate this native partner + (?).

(folio 20)

Sat. Jan. 19th
Discussion of **HARING**'s planning.
KERR on collections of Hoover [Institute and Library, Stanford].
Importance of Amami as (?) of Reversionist (?) (**HARING**).
Present: **COOLIDGE, MURDOCK, HARING, SMITH, GLACKEN, ANDRADE, HARKNERS, ELMENDORF, KERR**, 9 a.m.
HARKNERS:
Advantage of quickies done in states train our staff.
HARING:
East coast?
MURDOCK:
Yale file to handle permanent basic materials—distributed to 15 universities.

(folio 21)

19th
MURDOCK:
2 additional sets of Ryukyuan files./ a. Stanford./ b. Civil Administration.
Need for Handbook stressed by **SMITH, COOLIDGE, HARING, MURDOCK**.
HARRISON [ANDRADE]:
Problem of CI+E files of SCAP, Tokyo.
HARING:
Need for permanent, private center.
COOLIDGE:
Sox Bradford, State, now interested in taking over CIE.
HARRISON [ANDRADE]:
Temporal loan of files at Tokyo, in CI+E.

(folio 22)

19th
MURDOCK:
Files assigned to University, but deposited for duration (or so long as must

necessary) with CI+E.

HARRISON [ANDRADE]:

University handles garioa [(GARIOA)] funds—many cases back under CI+E.

SMITH:

University has no micro film equipment, no IBM.

HARRISON [ANDRADE]:

USCAR providing service to Army, rather than reverse.

HARRISON [ANDRADE]—MURUDOCK discussion of Yale file: cost, physical shape.

MURDOCK:

Stanford Project/ No. 1.

(folio 23)

19th

SMITH presents CI+E project program./ a. difficulty to sell any project this year./ b. double aims (a. science, b. immediacy)/ c. Army interested only in Okinawa [(沖繩島)].

MURDOCK:

note thread as military base Okinawa is it. except for probable crisis.

c. immediate utility + Okinawa./ d.

(folio 24)

SMITH:

Projects proposed:

- I. community study—conservative community,
- II. study of community in transitions,
- III. study of problem in social and cultural psychology.

instructed to keep requests at absolute minimum.

MURDOCK:

III rigid be covered in I + II, if they are done thoroughly.

Proposed that a man from Japan should make a study offering comparative measure.

(folio 25)

19th

COOLIDGE:

Parting out differences and similarities between Japan + Ryukyus.

(**KERR:** (?) our reversion problem.)

Absent 5 minutes.

MURDOCK:

Problem of bringing in Japanese scientists, difficult hire re[garding] reversionist policy.

HARKNERS:

suggests use of assistants as interpreters when actually the interpreters is a trained Japanese anthropologist.

(folio 26)

MURDOCK:

The (?) of Japanese scientists shouldn't affect project. The best means.

HARING:

Value of training of a Japanese in linguistics.

MURDOCK:

Linguistic studies of utmost scientific importance not of practical interest in army service, SIRI, not Army.

Army would lend logistical support to science projects not funded by Army.

(folio 27)

ALLAN [SMITH]:

Archaeology, too, should be added to (?) program.

COOLIDGE:

Where?

SMITH:

a. Yonaguni = twist Formosa + Miyako/ b. shell material on Okinawa.

COOLIDGE:

Burd program. Study of 2 or 3 sites, checking on their links between South + Japan.

HARKNERS:

Move to establishing Okinawa museum. Committee.

MURDOCK:

Need for modern culture + personality study.

HARING:

Amami as the point between Okinawa + Japan needs personality + culture study.

(folio 28)

HARRING:

Culture + personality study basic to study of reversionist.

MURDOCK:

One man should do both studies, 2 communities.

HARRING suggests Nisei now on Amami.

ALLAN [SMITH]:

Army people interested (Hospital psychiatrists, etc).

MURDOCK:

Probably can bringing in support of medical people.

ALLAN [SMITH]:

Losing enthusiasm for spoken Japanese is prerequisite./ local people don't use Japanese.

(folio 29)

ALLAN [SMITH]:

Local language used almost exclusively.

Japanese is the lingua franca, used only toward outsiders + inter island people.

HARKNERS:

shortage of ca 3,000 teachers; abut 4,000 have been there, 2,400 have had not more than 3 months beyond H[igh] S[chool], 100 no training begun H. S., 500 have hand only 2 years H. S.

(folio 30)

HARKNERS to K[ERR]:

only 50 of 800 students are enrolled in education expenses planned for 300./ need 3,000./ Kabira [(川平)]-san.

(folio 31)

19th 2 p.m.

DIFFENDERFER, COOLIDGE, MURDOCK./ ELMENDORF—GLACKEN, SMITH, HARKNERS, ANDRADE.

DIFFENDERFER:

Immediate use during garioa funding period (thus June 1953)/ cost problem.

COOLIDGE notes importance of SIRI to Army as evidence of important, creditable work done./ 1. Public Health + Welfare,/ 2. Natural Resource + Ag[riculture],/ 3. C. I. + E.

(folio 32)

19th

The SIRI program will indicate to the USCAR what it needs to meet local problems in civil information + education.

COOLIDGE:

Can ORO [(Operations Research Organization)] be brought into picture.

not that MA made no difference; rather, that it wasn't felt as such by center. (?) (?)

(folio 33)

ORO for the (?) 3.

USCAR for Reversionist Documentation issues,/ Particularist issues/ land tenure, etc. > for immediate use.

ORO studies in community change/ Explain Reversionst stance/ Documentation.

(folio 34)

SMITH:

On Public Opinion polls, a post separate from (?) Departments.

MURDOCK:

PO [(Public Opinion)] poller actually a service job, not consistent with Pacific Science Board.

SMITH explained the Amami poll—and its value.

Discussion of validity of polls.

Discussion of expectable nature of Okinawans as distinct from Japanese.

(folio 35)

MURDOCK proposes Navy promising graduate students sent to field as assistants to key men, on university grants, with only logistical support on a reimbursable basis.

Would double productivity.

COOLIDGE:

Need for permanent slot for anthropologists.

DIFFENDERFER:

Bringing in Leivan [(Richard W. LIEBAN?)] to Naha Centers for CI+E.

SMITH:

An anthropologist should be attached at a larger level—as [Margaret?] MEAD, etc: advisor.

(folio 36)

COOLIDGE:

Problem of logistic support.

DIFFENDERFER:

Problem of interpreters/ Cost in the field per month. ¥2500. ¥6000 per month total?

Coolidge
Should we recruit
an anthropologist as a
permanent member of the team

Having
appreciation & interest
in local people & culture

Smith: no Ryukyuan history
taught in schools till 1946

Smith explained the Arsenium
pill - and its value

Discussion of validity of pills

Discussion of exportable nature
of Arsenium as distinct
from Quinine

Coolidge
What means in
Ryukyuan history
Iha, Shunshukins
Higayama

Having
Distinct & militarism
at military

clearly differentiate

左上 (folio 14) 現地の社会や文化に理解を示す必要の指摘から、「1946年まで琉球史は教えられてこなかった」という郷土史を自覚させる必要へと話題が移っている。

左下 (folio 15) 3人の琉球史家が候補にあがった後に、「軍国主義(武士道)と軍隊(侍)への不信は[日本人から琉球人を]はっきりとわかる」という見解をヘリングが述べる。

右 (folio 34) 奄美での世論調査など前日の会議の話題が再確認されるなかで、「日本人とは別個[の人々]として沖縄人に期待できる性向について議論」されたことがわかる。

注

NA=米国国立公文書館

OPA=沖縄県公文書館

Freimuth=エドワード・フライマス・コレクション

GHK=ジョージ・H・カー文書

RU=琉球大学付属図書館

- 1 Coolidge to Lewis 12/6/51 NA RG260/HCRI-AO/B29/F4 (OPA 2224).
- 2 鹿野政直 『戦後沖縄の思想像』 (東京: 朝日新聞社, 1987年). 28-36, 68-74頁.
- 3 “Solving the Okinawan Population Pressure Crisis – An Outline for Hoover Institute and Pacific Science Board Activity, 1951-1953, with Proposals for Action” (George H. Kerr) n. d. OPA GHK1M01005.
- 4 Coolidge to Lewis 12/6/51.
- 5 “Documentation Project Supporting USCAR Activities” (anonym) 1/25/52 NA RG260/HCRI-AO/B29/F4 (OPA2043).
- 6 仲宗根源和 『琉球から沖縄へ—米軍政混乱期の政治事件史—』 (那覇: 月刊沖縄社, 1973年). 48-49頁.
- 7 National Research Council, *First Annual Report: Pacific Science Board 1947* (Washington: National Research Council, 1947). P. 22; National Research Council, *Third Annual Report: Pacific Science Board 1949* (Washington: National Research Council, 1949). P. 117.
- 8 Allan H. Smith, “Recent Anthropological Research in the Ryukyu Islands,” *Clearinghouse Bulletin of Research in Human Organization*, vol. 2 (1953): 3.
- 9 David H. Price, *Anthropological Intelligence: The Deployment and Neglect of American Anthropology in the Second World War* (Durham and London: Duke University Press, 2008). Pp. 74-75.
- 10 アレックス・アベラ 『ランド 世界を支配した研究所』 (東京: 文藝春秋, 2009年) (原題 Soldiers of Reason: The Rand Corporation and the Rise of the American Empire).
- 11 “People of the Ryukyus: An Orientation Lecture for USCAR Personnel, March 1952” (Allan H. Smith) 5/2/52 OPA Freimuth29688.
- 12 “Summary of Findings in ‘Final Field Report on Anthropological Study – Okinawa’” (CI&E Department) 5/13/52 NA RG260/HCRI-AO/B29/F4.
- 13 Douglas G. Haring, *The Island of Amami Oshima in the Northern Ryukyus*, Scientific Investigations in the Ryukyu Islands (SIRI) Report #2 (Washington D. C.: Pacific Science Board, National Research Council, 1952). P. 18.
- 14 “The Reversion Movement on Amami Ohshima: A Report Based upon the Findings of a Public Opinion Survey, September 1951” (Allan H. Smith and William W. Elmendorf) 3/14/52 NA RG260/HCRI-AO/B228/F11.
- 15 Haring, *The Island of Amami Oshima*. P.81.
- 16 中生勝美 「日本占領期の社会調査と人類学の再編—民族学から文化人類学へ—」 『地域研究としてのアジア』 末廣昭 (編), 岩波講座『「帝国」日本の学知』第6巻 (東京: 岩

- 波書店, 2006年). 同調査部の活動については中学生の詳しい解説がある。
- 17 “Final Report of the Public Opinion Survey Unit” (Iwao Ishino) Apr/52 NA RG260/HCRI-AO/B228/F9. P. 6.
- 18 “The Reversion Movement on Amami Ohshima” (Smith and Elmendorf). Pp. 4-15.
- 19 “Final Report of the Public Opinion Survey Unit” (Ishino). Pp. 1-2.
- 20 Haring, *The Island of Amami Oshima*. P.21.
- 21 川平朝申 『終戦後の沖縄文化行政史』(那覇: 月刊沖縄社, 1997年). 289頁.
- 22 Haring, *The Island of Amami Oshima*. Pp. 17-18.
- 23 Haring, *The Island of Amami Oshima*. Pp.20-21.
- 24 Haring, *The Island of Amami Oshima*. Pp. 87-88.
- 25 Price, *Anthropological Intelligence*. Pp. 79-77.
- 26 George H. Kerr, *Okinawa: The History of an Island People*, revised edition (Boston; Rutland, Vermont; Tokyo: Tuttle Publishing, 2000). P. 117.
- 27 Haring, *The Island of Amami Oshima*. Pp. 90-91.
- 28 Haring, *The Island of Amami Oshima*. P. 78.
- 29 Haring, *The Island of Amami Oshima*. Pp. 90-91.
- 30 “United States Civil Administration of the Ryukyu Islands: Organization Chart” (Executive Office) 5/1/52 OPA Freimuth24633. ハークネスについては1952年5月現在のUSCAR組織図で民間情報教育局への所属が確認できるが、アンドラーデの姓名および所属についてはカーのメモからの推測である。
- 31 大田昌秀 「占領下の沖縄」 岩波講座『日本歴史』23現代2, 浅尾直弘ほか(編), (東京: 岩波書店, 1977年). 297頁.
- 32 宮城悦二郎 「解説」『民事ハンドブック』(『沖縄県史』資料編第1巻, 沖縄戦1, 和訳篇) (那覇: 沖縄県教育委員会, 1995年). (3)-(5)頁.
- 33 “Solving the Okinawan Population Pressure Crisis” (Kerr).
- 34 “Recommendations for New SIRI Anthropological Projects, 1952” (Diffenderfer) 11/19/51 NA RG260/HCRI-AO/B29/F4.
- 35 “SIRI Specialist” Diffenderfer to Civil Administrator 11/21/51 NA RG260/HCRI-AO/B29/F4.
- 36 Ira Bashkow, “The Dynamics of Rapport in a Colonial Situation: David Schneider’s Fieldwork on the Islands of Yap,” *Colonial Situation*, ed. by George W Stocking, Jr. (The University of Wisconsin Press, 1991). P. 182.
- 37 “Final Field Report on Anthropological Research in Yaeyama” (Allan H. Smith) Sep/52 OPA Freimuth29677. Pp. 16-17.
- 38 “SIRI Contract” (Department of the Army and National Academy of Science) n. d. RU 沖縄戦後資料第17巻第3冊. P. 1.
- 39 琉球政府文教局 『琉球史料』復刻版(那覇出版社, 1988年)(那覇: 琉球政府文教局, 1961年). 51頁.
- 40 “Final Report of the Public Opinion Survey Unit” (Ishino). Pp. 14-15.
- 41 泉水英計 「サイライ・プロジェクトー米軍統治下の琉球列島における地誌研究一」

- 『米軍統治下の沖縄における学術調査研究』（新垣公弥子と共編）（平塚：神奈川大学国際経営研究所，2008年）. 70-71頁.
- 42 泉水 「サイライ・プロジェクト」. 5頁.
- 43 川平 『終戦後の沖縄文化行政史』. 306頁.
- 44 “People of the Ryukyus” (Smith). P.2.
- 45 “People of the Ryukyus” (Smith). P.1.
- 46 伊佐真一 『伊波普猷批判序説』（東京：影書房，2007年）. 等閑視されがちであった戦中期の琉球史家の発言を伊佐は批判的に検討している。